プロローグ

住宅地のあたり前の一戸建て。それほど広くない敷地に、猫の額ほどの庭を余して、二階家が建っている。

その前に黒塗りのハイヤーが二台止まった。喪服を着た初老の夫婦と、大学生らしき若者、黒のワンピースを着けた若い女の四人が、先頭の車から降りる。

夫婦の夫人の方が、愛おしそうに白布で包まれた骨箱を抱いていた。長身で痩せた夫は無念そうな瞳を宙に向け、顎をひいている。

若者は疲れきった様子の両親をいたわるように、二人の足元を注視している。

女は唇をきつく結び、三人の背中を見つめていた。もはや涙はない。腫れた瞼が、とめどなく流した涙の跡をうかがわせる。

三人の親子が家の門をくぐると、つかのま女は躊躇したように足を止めた。スカートの

裾から、黒いストッキングに包まれた形のいいほっそりとした脚がのびている。

親子のしんがりを歩いていた若者が、女の逡巡に気づいた。

「お母さん……」

骨箱を抱きしめた母親に声をかける。父親が振り返り、女を見つめた。母親は声に気づくゆとりがない。赤い目を宙に向けたまま、玄関を入っていった。

父親は女と目を合わせた。とまどいと苦しみがその目に浮かんでいる。

「よかったら……」

しわがれた声を父親は唇の間から押し出した。二台目の車を降りた老人たちが二人を見つめている。

「いえ……」

門をくぐろうとせず、女は首を振った。懸命の努力で微笑みを浮かべる。

「お疲れでしょうし。それに、今日はお母様とふたりだけにしてさしあげたいんです」

父親は目を閉じ、ごくりと喉を鳴らした。

「ありがとう。ありがとう……」

「どうか、お力落としでしょうけど、お体に気をつけて下さい」

女も今は目を閉じていた。わずかに鼻にかかった声でいい、深く頭をさげた。

「ありがとう。国夫は本当にいい人とおつきあいさせていただいた」

父親は礼の言葉をくり返した。

「しばらくしましたら、またお参りにうかがわせていただきます」
父親は頷(うなず)いた。
女は後退(あとずさ)るように門を離れた。もう一度頭をさげ、歩き始める。
その家の裏手に、濃いグレイのルノーサンクが駐(と)められていた。ハンカチと共につかんでいたバッグから、女はキィをとり出し、運転席のロックを解いた。
素早い身ごなしでハンドルの前にすわる。助手席にバッグを置き、イグニションキィをさしこむと、女はハンドルの上に両手をのせた。
フロントグラスごしに、一家とその親族が悲しみから深いあきらめに気持を整理すべく入っていった家を見つめた。
そこには、女にも強い、忘れがたい思い出があるようだった。
抑えこんでいたものが切れた。女はハンドルの上に顔を伏せた。肩が激しく震える。
そうして長い間、女は泣きつづけた。
やがて顔を上げた。ルームミラーを自分に向け、ハンカチで目をぬぐう。唇をかみしめ、イグニションキィを回した。

ルノーサンクがゆっくり動き始めるのを、伊神(いがみ)は、駐めたクラウンの中からじっと見つめていた。長身で端整な顔だちをしているが、表情にはまったくとらえどころがない。
濃いグリーンのスーツに白いシャツを着け、ネクタイの結び目を小さくきっちりとカラーにくいこませている。
ルノーがその家の角を曲がると、伊神もクラウンのエンジンを始動させた。
昨晩の通夜以来、伊神は車に乗りづめだった。
長男を亡くし、悲しみの底に沈んだ家族と、恋人を失った若い女をずっと観察しつづけていたのだ。
悲しみには無縁な男だった。
怒りにも喜びにも関係がない。
伊神は、行動のすべてを自分の決めた予定通りに実行する男だった。
三十七年間の人生の中で、人間的な暮らしをしたのはごくわずかだった。父親は知らない。母親も三歳のときに、彼を捨てた。
民生委員の手で預けられた施設で、数年の間、負け犬の日々がつづく。あるとき、耐えることの無意味さに気づき、食事のたびに自分をおしのけ、ときにはのしかかり、彼の分を奪おうとする上級生の目を箸(はし)でつき刺した。
失明こそまぬがれたものの、それ以来、施設の上級生は伊神を餌食(えじき)にはしなくなった。
初めて他人の体を傷つけたときの感触を、伊神は覚えている。言葉も、いかなる感情の起伏もそこにはなかった。
馬乗りになり、自分の首に手をかけ、
「飯をよこせ」

と荒々しく叫ぶ六年生の顔は今でも思い出すことができる。

左手で膳の上の塗り箸をつかむ。右手に持ちかえる。つき立てる。この動作の間、伊神は一度も瞬きをしなかった。ただ無言で相手の顔を見上げていた。

五年後、伊神は施設を出た。十年以上、そこにいたにもかかわらず、友人はひとりもいなかった。事件以来、職員ですら伊神を恐れ、気味悪がっていた。

伊神は眠るのと食事を摂るためだけに借りている１ＤＫのマンションには、壜に詰められた砂が幾つも並んでいる。

仕事と仕事の合い間に、あてどもなく伊神は旅をすることがある。そして砂を持ち帰る。施設にいたとき、伊神は砂場でしか遊ばなかった。上級生になっても仲間ができず、野球やドッジボールといった集団遊戯には加われなかった。幼児だけがそこで遊ぶ筈の砂場が、彼のひとり遊びの舞台となった。

雨の日ですら、伊神は砂場で遊んだ。

その砂の色を伊神は忘れることができない。積み上げても積み上げても、サラサラと崩れていく砂を、伊神は好きだった。

何時間、何日とかけてこしらえようと、砂の造作は、あっという間に崩れさる。

人も同じだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。